第603回 定期演奏会 サントリーホール 19時開演

SUBSCRIPTION CONCERT No. 603/ Suntory Hall 19:00

指揮

Associate Conductor & Creative Partner

コンサートマスター

Concertmaster

シャリーノ SCIARRINO

シューベルト

「休憩] [Intermission]

> ベリオ BERIO

鈴木優人 (指揮者/クリエイティヴ・パートナー) -p.6

MASATO SUZUKI

長原幸太

KOTA NAGAHARA

夜の自画像 [約8分] -p.9

Autoritratto nella notte

交響曲 第4番 八短調 D417 (悲劇的) [約31分]-p.10

Symphony No. 4 in C minor, D 417 "Tragic"

I. Adagio molto – Allegro vivace

II. Andante

III. Menuetto: Allegro vivace

IV. Allegro

レンダリング

~シューベルトの未完の断片を用いて~ [約35分] -p.12

Rendering

I. Allegro

II. Andante

III. Allegro

※当初の発表から出演者と曲目が変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

協力: アフラック

第123回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール 14時開演

YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No. 123 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

第636回 名曲シリーズ サントリーホール 19時開演

POPULAR SERIES No. 636 / Suntory Hall 19:00

指揮

Associate Conductor & Creative Partner

ギター Guitar

コンサートマスター

Concertmaster

ベートーヴェン BEETHOVEN

ロドリーゴ

RODRIGO

[休憩]

ベートーヴェン BEETHOVEN 鈴木優人(指揮者/クリエイティヴ・パートナー)-p.6

MASATO SUZUKI

村治佳織 -p.8

KAORI MURAJI

小森谷 巧 TAKUMI KOMORIYA

序曲〈レオノーレ〉第3番作品72b [約14分] -p.14

Overture "Leonore" No. 3. op. 72b

ある貴紳のための幻想曲 [約21分] -p.15

Fantasía para un gentilhombre

| ビリャーノとリチェルカーレ

|| エスパニョレータとナポリ騎兵隊のファンファーレ

||| たいまつの踊り

|\/. カナリオ

交響曲 第5番 八短調 作品 67 〈運命〉[約31分] -p.16

Symphony No. 5 in C minor, op. 67

I. Allegro con brio

II. Andante con moto

III. Allegro – IV. Allegro

※当初の発表から出演者と曲目が一部変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) * 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力: 横浜みなとみらいホール(11/23)

※11月24日公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

第232回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SATURDAY MATINÉE SERIES No. 232 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

第232回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール 14時開演

SUNDAY MATINÉE SERIES No. 232 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮 Conductor

チェロ Cello

コンサートマスター

Concertmaster

井上道義 -p.7 MICHIYOSHI INOUE

北村 陽 -p.8

YO KITAMURA

長原幸太

KOTA NAGAHARA

ハイドン HAYDN

チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 [約24分] -p.17

Cello Concerto No. 1 in C maior

- I. Moderato
- II. Adagio
- III. Allegro molto

「休憩] [Intermission]

ブルックナー **BRUCKNER** 交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版) [約64分] -p.18

Symphony No. 7 in E major, WAB107 (Nowak edition)

- Allegro moderato
- II. Adagio. Sehr feierlich und sehr langsam
- III. Scherzo: Sehr schnell
- IV. Finale: Bewegt, doch nicht schnell

※当初の発表から出演者が一部変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

第27回 読響アンサンブル・シリーズ

よみうり大手町ホール 19時30分開演(19時00分から解説)

YOMIKYO ENSEMBLE SERIES, No. 27 / Yomiuri Otemachi Hall 19:30 (Pre-concert talk from 19:00)

※出演者の一部と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《鈴木優人プロデュース〈四季〉&ケージ》

プロデュース、指揮、チェンバロ、ピアノ Producer, Conductor, Harpsichord, Piano

> 独奏ヴァイオリン Solo Violin

> > ナビゲーター Navigator

> > > ケージ

ヴィヴァルディ VIVALDI

ケージ

CAGE

ヴィヴァルディ VIVALDI

> [休憩] [Intermission]

> > ケージ CAGE

ヴィヴァルディ VIVALDI

ケージ

CAGE ヴィヴァルディ

VIVALDI

一柳 慧

鈴木優人 (指揮者/クリエイティヴ・パートナー) -p.6

MASATO SUZUKI (Associate Conductor & Creative Partner)

長原幸太(読響コンサートマスター)

KOTA NAGAHARA (YNSO Concertmaster)

鈴木美潮 (読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員) MISHIO SUZUKI

私たちの春が来る [約5分]

Our Spring Will Come

ヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』第1番〈春〉[約10分]

Il cimento dell'armonia e dell'inventione No.1 "La primavera"

〈ヴァイオリンと鍵盤のための6つのメロディ〉から [約6分]

Excerpts from "Six Melodies for Violin and Piano"

ヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』第2番〈夏〉「約10分]

Il cimento dell'armonia e dell'inventione No.2 "L'estate"

〈リビングルーム・ミュージック〉から"メロディ" [約3分]

"Melody" from Living Room Music

ヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』第3番〈秋〉[約11分]

Il cimento dell'armonia e dell'inventione No.3 "L'autunno"

クレド・イン・アス 「約13分]

Credo in Us

ヴァイオリン協奏曲集『和声と創意の試み』第4番〈冬〉[約9分]

Il cimento dell'armonia e dell'inventione No.4 "L'inverno"

イン・メモリー・オヴ・ジョン・ケージ [約3分]

ICHIYANAGI In Memory of John Cage

● 文化庁委託事業「令和2年度 戦略的芸術文化創造推進事業」

主催:文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

協力: 近藤鋳造所/近藤幸男

(指揮者/クリエイティヴ・パートナー)

MASATO SUZUKI. Associate Conductor & Creative Partner

新時代のホープが 幅広いレパートリーを披露



マルチな才能で活躍している次世代の旗手が、シューベルトやベートーヴェンか らベリオ、シャリーノまで多彩な作品を披露する。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学および同大学院修了。オランダ・ハーグ 王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏 者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリ ジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJと は15年にバッハ〈マタイ受難曲〉、17年にモンテヴェルディの歌劇〈ポッペアの戴冠〉 を指揮して絶賛され、今秋にはヘンデルの歌劇〈リナルド〉を上演し注目を浴びた。 また、世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロ ジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演している。

作曲家としても活躍するほか、13年からスタートした調布国際音楽祭のエグゼ クティヴ・プロデューサーを務めるなど、多岐にわたり活動している。第18回ホテル・ オークラ音楽賞受賞。NHK-FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。20年2月 には、第18回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞した。今年4月に読響の指揮者/ クリエイティヴ・パートナーに就任。10月には読響の《第49回サントリー音楽賞 受賞記念コンサート》で、来日がかなわないカンブルランの代わりに、メシアン〈峡 谷から星たちへ〉を指揮して深遠な世界を鮮やかに描き絶賛を博した。

指揮

井上道義

MICHIYOSHI INOUE, Conductor

鬼才が描く ブルックナーの壮大な宇宙



斬新な発想力と豊かな音楽性を誇る、日本を代表する"カリスマ"指揮者。これ までマーラーの作品やオペラなどで共演を重ねてきた読響&道義が、今回はブル ックナーの傑作と名高い交響曲第7番で作品の神髄に迫る。

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。71年グィド・カンテルリ指揮者コンク ールに優勝した後、世界的な活躍を開始する。これまで、ニュージーランド国立響 首席客演指揮者、新日本フィル音楽監督、京都市響音楽監督、大阪フィル首席指揮 者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を歴任。また、シカゴ響、ハンブル ク響、ミュンヘン・フィル、スカラ・フィル、レニングラード響、フランス国立管、ブ ダペスト祝祭管、KBS響、ベネズエラ・シモン・ボリバル響など世界一流のオー ケストラへ登場している。

2007年、日露五つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響 曲全曲演奏プロジェクト」を実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。14 年4月、病に倒れるが、同年10月に復帰を遂げる。17年の大阪国際フェスティバ ル「バーンスタイン: ミサ」を総監督として率い成功へと導き、19年にはオペラ〈ド ン・ジョヴァンニ〉で既成概念にとらわれない舞台を作り、高く評価された。また、 15年の全国共同制作オペラ〈フィガロの結婚〉(野田秀樹演出)では、総監督として 10都市14公演の巡回公演を大成功させ、今秋に再演された。

渡邉暁雄基金特別賞、東燃ゼネラル音楽賞、大阪文化賞、大阪文化祭賞、音楽ク リティック・クラブ賞、有馬賞など受賞多数。



©Ayako Yamamoto

ギター

村治佳織

KAORI MURAJI, Guitar

卓越した技巧と音楽性を持ち世界的に活躍する クラシック・ギタリスト。15歳でCDデビューを飾り、 フランス留学から帰国後、積極的なソロ活動を展開。 国内および欧州のオーケストラと共演を多数重ね、 2003年英国の名門クラシックレーベルDECCAと 日本人としては初の長期専属契約を結ぶ。NHK-E テレ「テレビでフランス語」、テレビ朝日「題名の ない音楽会」「徹子の部屋」などメディアへの出演 も多い。17年4月からJ-WAVE「CLASSY LIVING」のナビゲーターを務めている。出光音楽賞、 村松賞、ホテルオークラ音楽賞、ベストドレッサー 賞(学術・文化部門)など受賞多数。読響とは、 04年にスペインの名匠、フリューベック・デ・ブル ゴス(元読響名誉指揮者)指揮の《定期》で共演し たほか、たびたび客演している。

11/1 | | | | | | | | |

11/20 日曜マチネー

2017年の第10回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクールで優勝した新星。2004年兵庫県生まれ。9歳でオーケストラと初共演、10歳で初リサイタルを行う。これまでに小林研一郎、大友直人、藤岡幸夫、アンドレイ・フェーヘルらの指揮で関西フィル、東京響、東京フィル、大阪フィル、兵庫芸術文化センター管などと共演している。18年5月、ロシアで開催されたチャイコフスキー国際青少年フェスティバルに招待された。山崎伸子、太田真実、ギア・ケオシヴィリ各氏に師事。17年、関西元気文化圏賞ニューパワー賞受賞。18年度よりヤマハ音楽支援制度奨学生。使用楽器は、上野製薬より貸与されている1668年製「カッシーニ」。2018年度の芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー修了。読響初登場。



チェロ 北村陽 YO KITAMURA. Cello

シャリーノ 夜の自画像

サルヴァトーレ・シャリーノ (1947~) は管弦楽曲 〈夜の自画像〉 で、かつてドレミのハーモニーが担っていた緊張感の推移を、別の方法で表現している。

シャリーノはイタリア・シチリア島のパレルモ出身。幼いころからアート全般に強い興味を示してきた。音楽はほとんど独学。20代でローマに移ってから、エヴァンジェリスティのもとで電子音楽の基礎を学んだ。ミラノで音楽院の教授、ボローニャで市立歌劇場の芸術監督を務めたのち、1983年にフィレンツェとペルージャの間にあるチッタ・ディ・カステッロに移住し、作曲に専念するようになる。

これまでに260ほどの作品を書いているが、そのカタログに目を通してみると、〈夜の自画像〉同様「夜 notte」や「夜の(または夜想曲)notturno」といった言葉を含むタイトルが目立つ(計13曲)。シャリーノは〈夜の自画像〉へのコメントに、「夜になるとものごとは生き生きとし始める」と書いた。闇の世界に惹かれる作曲家の様子がうかがえる。

管弦楽はオーボエを欠いた二管編成をとる。弦楽五部もそれぞれ6・6・4・4・2の指定で、小規模のアンサンブルを指向する。曲は一閃の和音で始まる。これは12人のヴァイオリンを6声に分けて鳴らした音だ。以後、ホワイトノイズ(シャー)やピンクノイズ(ザー)を思わせる"雑音"を背景に、「生き生きとし始め」たものごとが残していったかのような、さまざまな音が前景に漂い、消え、また立ち現れ、やがて溶けていく。

冒頭に触れた「緊張感の推移」を司るのは、背景のノイズ群だ。これが止む瞬間の解放感は、作品の音楽的な起伏をくっきりと描き出す。これは、不協和音による長い緊張のあと、協和音でそれをゆるめる、調性音楽の和声法に比すことができる。アイデア自体は単純だが、その効果を最大化する作曲手腕はたいへん優れている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲: 1982年/初演: 1983年、スイス・ルガーノ/演奏時間: 約8分 楽器編成/フルート2 (アルトフルート持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、打楽器 (シンバル、銅鑼、スチールプレート)、弦五部 フランツ・シューベルト (1797~1828) はその生涯に、未完成作品も含め10 作以上の交響曲に取り組んだ。作曲家は生前、私的な上演はあったにせよ、記録に残るような公的な形ではそれらの交響曲を演奏してもらえなかった。にもかかわらずシューベルトが、うまずたゆまずシンフォニーの作曲に打ち込んだのはなぜか。

ひとつにはベートーヴェンの存在が、もうひとつにはベートーヴェンを受け入れるにいたった聴き手の存在が、理由として考えられる。ベートーヴェンは1808年に交響曲第5番〈運命〉を書き上げ、同年末にウィーンでそれを初演した。この交響曲は当初「奇抜な」作品と評価された。その真価をはじめて明文化したのは、E.T. A. ホフマンの1810年の批評だ。「聴き手の心をひとつの気分に引き止めておく統一を生み出すのは、内部的仕組みや楽器法などのほかに、特に個々の主題相互の緊密な類似性である」(『一般音楽新聞』1810年7月4日・11日号)

長い批評の前半で、器楽こそが音楽の本質(絶対音楽の理念)であると指摘したホフマン。彼は器楽の最高峰こそが交響曲であり、いまやその最大の作曲家はベートーヴェンだと書いた。聴き手のほうが「奇抜な」交響曲に追いついた瞬間である。こうして1810年以降、作曲家のなかには交響曲をその創作活動の中心に置く者が出始める。シューベルトもそのひとりだ。

シューベルトは1810年代、16歳から21歳までの間に六つのシンフォニーを書き上げた。いずれも寄宿学校「コンヴィクト」のオーケストラのため、もしくはハトヴィヒの私設管弦楽団のために作曲したといわれる。ハトヴィヒは当時、ウィーン・ブルク劇場のヴァイオリン奏者を務めており、シューベルト家の弦楽四重奏団にも参加していた。

内輪の集まりとはいえオーケストラがあり、個人的なつながりとはいえ依頼者がいて、非公式ではあっても発表の場所がある。いまや交響曲は音楽の最高峰だ。若いシューベルトは意欲に燃えて創作に打ち込んだことだろう。

交響曲第4番ハ短調〈悲劇的〉は、この1810年代のシンフォニー群の中心をなす1曲である。完成は1816年4月27日。前年の秋には作曲に着手していたと考

えられる。タイトルは作曲者本人がつけた。公開初演は作曲家の死後、1849年に ライプツィヒにて。ただし先述の通り、作曲直後にウィーンのハトヴィヒ家で、私設 オーケストラが演奏しているだろう。

第1楽章は打撃音のようなユニゾンで幕を開ける。ゆったりとした序奏だが、前に進む力は大きい。というのも、多くのフレーズが小節の頭からは始まらずに、前後に1拍ずれているから。前のめりの力動性が、主部に入ってもポイントとなる。第1主題では駆け上がるような上行音型に、シンコペーションの長い音符が呼応する。この弾むリズムは第2主題にも引き継がれ、この楽章の"駆動装置"となっている。

第2楽章の二つの主題は変イ長調とへ短調。これは第1楽章の八短調と変イ長調の二つの主題と、調性の点で鏡写しのように呼び合っている。こうした工夫で作曲家は、両楽章を対照的でもあり似通ってもいる兄弟のように仕立てた。

一見メヌエットのような体裁を取る第3楽章は、なかなかの曲者。冒頭からへミオラ(4分の3拍子の2小節6拍を、2分の3拍子3拍とみなす拍節変化)が続く。そのへミオラも小節線から1拍前にはみ出ている。この二重のひねりが第3楽章に、メヌエットというよりスケルツォ(悪ふざけの意)と呼ぶにふさわしい性格を与えている。

第4楽章を束ねる"かすがい"は、印象的な第1主題に隠された音程関係だ。つまり短3度、長3度、短2度、完全4度。とくに長・短3度と、その裏返しである短・長6度(たとえばド→ミ上行に対するミ→ド上行)、完全4度とその裏返しである完全5度(たとえばソ→ド上行に対するド→ソ上行)が、各所で耳を引く旋律を作り出す。楽章内に散らばっていた音程関係はやがて、再現部で第1主題として統合される。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲: 1815年着手、1816年4月27日完成/初演: 1849年11月19日、ライブツィヒ/演奏時間: 約31分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、 弦五部

Pingram Notes

フランツ・シューベルトの交響曲には未完成作品が多い。最も有名なのは、まさにそれが愛称となった〈未完成〉交響曲D759。その他に、草稿ではあるが全4楽章がほぼ完璧に残るホ長調交響曲D729、同じく草稿で三つの楽章の断片しか残存しない二長調交響曲D936Aなどがある。

D759、729、936Aの三曲はたびたび補筆の試みにさらされてきた。たとえばホ長調D729は、シューベルトの死後、その兄フェルディナントがメンデルスゾーンに完成を依頼した(が、メンデルスゾーンはそれを果たさなかった)。それ以来、バーネットやワインガルトナー、ニューボールドらが補作を行っている。二長調D936Aでも同様に、ギュルケやニューボールドが未完の作品を"一人前"にしようと腕を振るった。これらの作業は基本的に、当時のウィーンのスタイルや作曲家の書き癖を踏まえて空白部分を埋めていくという点で、同じ方向を向いている。

ルチアーノ・ベリオ (1925~2003) の〈レンダリング〉(1989~90年) は、 D936A (1828年) の補筆作という意味では先達に続くものだが、その方針はお よそ似ても似つかない。このタイトル〈レンダリング〉は「翻案すること」の意。本 歌の趣旨は生かすが表現法は自分に引きつける。ベリオの仕事の本質がこの表題 にはっきりとあらわれている。

シューベルトはD936Aに最後の時を費やしたが結局、書き上げられなかった。 作曲家が残したのは三つの楽章の草稿で、譜面はオーケストラ譜でなくピアノ譜(大 譜表)の体裁をとる。五線紙は16段(大譜表8段)組、スケッチは片面のみで総数 12葉。いずれの楽章も音楽に不完全なところが残る。ピアノ譜で書かれているので、 ごく一部の楽器指定以外、管弦楽編成も不明だ。

ベリオは次のように基本方針を立てた。シューベルトの書き残した部分はそのまま生かす。オーケストレーションは19世紀前半のスタイル。空白部分は20世紀後半の時代様式およびベリオ個人のスタイルに基づいて埋める。その結果、音楽は1.5世紀分の時間を、振り子のように行ったり来たりすることとなった。管弦楽はチェレスタを除いて〈未完成〉交響曲と同じ編成だ。

第1楽章の冒頭を、少し長くなるが記述すると「ドードードドー、ドシラソーミー

ソーラーソー」(階名唱)となる。大切なのは楽句前半部分のリズム「長長短長(タータータター)」と、後半部分の音程「短3度(ソミ)/長2度(ソラ)」だ。シューベルトの空白を埋めるベリオの創作部分は20世紀音楽なのだが、そのどこか奥の方で「タータータター」のリズムと「ソミ/ソラ」の音程とが鳴り続けている。シューベルト部からベリオ部への移り変わりでは、音楽はまるで面取りを忘れた大根のように煮崩れていく。ただそれは、角が取れて見かけが変わっただけで、大根の実体は残っている。その実体が、ここでは「長長短長」と「短3度/長2度」というわけだ。

第2楽章も凝っている。シューベルト部にあらわれる「ラーシー、ドシラシー」(階名唱)のリズムと音程とが、"煮崩れた"先のベリオ部で、やはり実体として響いている。

シューベルトは第3楽章で、対位法とソナタ形式とを結び付けようとした。その試みは、ハイドンやモーツァルトから続く交響曲作曲家の伝統だ。シューベルトの新機軸はそこに、旋律の歌謡性を付け加えること。シューベルト部では歌うようなテーマが、ポリフォニックに発展していく。ベリオ部に入るとその対位法がにわかに混線する。まるで迷路で方向感覚を失ったかのようだ。やがて暗がりの向こうに一筋の明かりが見えて、そこに向かうとまたシューベルト部に戻る、といった趣向。ベリオは、シューベルトのポリフォニーには明快なところと曖昧なところとがあると考え、自分の補筆部分ではその曖昧さを引き受けようとしたのかもしれない。旧対新/明快対曖昧の二重の対比が情緒の振り幅を広げ、終楽章の迫力を増幅させている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲:1989~90年/初演:1989年6月、アーノンクール指揮、ロイヤル・コンセルトへボウ管弦楽団 (第 1楽章と第2楽章)、1990年4月、シャイー指揮、同管弦楽団 (全曲)、いずれもアムステルダム/演奏時間:約35分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、 ティンパニ、チェレスタ、弦五部

ベートーヴェン **序曲 〈レオノーレ〉第3番** 作品72b

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) が完成した唯一のオペラ〈フィデリオ〉 (当初の題は〈レオノーレ〉) 第2版のための序曲。オペラ自体は、1805年に第1版、1806年に第2版が初演されたが、不評に終わった。しかし1813年初演の〈ウェリントンの勝利〉で人気が急上昇したベートーヴェンは、それを機にさらなる改訂に着手。1814年に第3版=決定版が初演され、今度は大成功を収めた。

ベートーヴェンは、当オペラのために四つの序曲を残した。内訳は、1805年の第1版用が〈レオノーレ〉第2番、1806年の第2版用が第2番を大幅に改訂した〈レオノーレ〉第3番、1814年の決定版用が全く別物の〈フィデリオ〉序曲で、死後に発見された〈レオノーレ〉第1番は「第1版用の不採用曲」として最初に置かれたものの、現在では「1807年プラハ公演用に作られ、上演が実現せずに破棄された曲」とみられている。

全2幕の本編は、「スペイン・セビリャ近くの刑務所に政治犯として投獄されている夫フロレスタンを、男装して牢番の部下となった果敢な妻フィデリオ(本名レオノーレ)が救出する」という、フランスの作家ブイイ原作の理想主義的な物語。この序曲は、本編全体を凝縮した交響詩的な音楽で、最終的には「長すぎる」等の理由でオペラから外された。しかしながら、大スケールの充実した内容から単独で演奏される機会はすこぶる多く、オペラ上演の際に挿入されるケースも少なくない。

曲は、第2幕のフロレスタンのアリア「人の世の美しき春にも」を用いた緊迫感漂うアダージョの序奏から、アレグロ、八長調の主部に移り、ヴァイオリンとチェロで出される主題を中心に進行。危機を救う大臣の到着を告げるトランペットのファンファーレが離れた場所で2度鳴らされた後、弦楽器の数を増やしながら突入するプレストのコーダで輝かしい終結を迎える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲: 1806年/初演: 1806年3月29日、ウィーン/演奏時間: 約14分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、 ティンパニ、バンダ (トランペット)、弦五部

ロドリーゴ ある貴紳のための幻想曲

20世紀中盤以降のスペインを代表する作曲家ホアキン・ロドリーゴ (1901~99) によるギターと管弦楽のための作品。同形態の看板曲〈アランフェス協奏曲〉の15年後の1954年秋、ギターの大巨匠アンドレス・セゴビア (1893~1987) のために作曲され、58年3月アメリカにてセゴビアの独奏で初演された。

本作には、17世紀スペインの作曲家でバロック・ギターの名手ガスパル・サンスの教則本に含まれた六つの素材がほぼ原型のまま用いられている。いわばレスピーギの〈リュートのための古風な舞曲とアリア〉に似たリメイク作品だが、ロドリーゴ流の現代的な処理と巧みな構成によって、スペインの民俗色溢れる魅力的なギター協奏曲に仕立てられている。ただし古典的な協奏曲の形ではなく、自由なスタイルの楽章が四つ続く組曲風の内容(ゆえに「幻想曲」と題されたのであろう)となっている。ちなみに「貴紳」はセゴビアまたはサンスを指すといわれてきたが、作曲者は「サンスが仕えていた君主ドン・フアン・デ・アウストリアを指す」と語ったという(濱田滋郎氏の解説に拠る)。

第1楽章 "ビリャーノとリチェルカーレ" アダージェット~アンダンテ・モデラート「村人の踊り」を意味する素朴な舞曲に、「スペインの歌によるフーガ」を原曲とする高雅な部分が続く。

第2楽章 "エスパニョレータとナポリ騎兵隊のファンファーレ" アダージョ〜アレグレット 優美で哀感漂うシチリアーナ風の主部に、軽快な間奏部分が挟まれる。なおサンスは一時期、スペインと関係が深いナポリに赴任していた。

第3楽章 "たいまつの踊り" アレグロ・コン・ブリオ リズミカルで若干おどけた小曲。

第4楽章 "カナリオ" アレグロ・マ・ノン・トロッポ カナリア諸島起源ともいわれる快活な舞曲で、6/8拍子と3/4拍子が交互に現れる。終盤にはカデンツァも弾かれる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲:1954年/初演:1958年3月5日、サンフランシスコ/演奏時間:約21分 楽器編成/フルート、ピッコロ、オーボエ、ファゴット、トランペット、弦五部、独奏ギター Program Notes

ベートーヴェン

交響曲 第5番 八短調 作品67 〈運命〉

クラシック音楽の象徴ともいえる劇的な作品。"傑作の森" と呼ばれる創作中期の1808年に、対照的な曲調の第6番〈田園〉と相前後して作曲され、同年12月アン・デア・ウィーン劇場における自主演奏会で同時に初演された。

ベートーヴェンは九つの交響曲の1曲ごとに新機軸を打ち出したが、本作ではそれがとりわけ顕著に示されている。全体としては、「八短調の第1楽章から八長調の第4楽章へ」、すなわち「闘争から勝利へ」「暗から明へ」の構図が大きな特徴。そして「ジャジャジャ・ジャーン」の4音の動機を軸に据えた稀有の発想、特にその「運命動機」の緻密な積み重ねで構築された第1楽章のユニークさが光っている。さらには運命動機が全楽章に登場して曲を統一する有機的な構成、第3楽章の最後をクレッシェンドしたまま第4楽章に入る斬新な手法、交響曲史上初となるピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの使用(すべて第4楽章のみ)など、独創的な要素が満載されている。

なお〈運命〉のタイトルは、「『運命はこのようにして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来しているが、彼の話は捏造が多く、これも信憑性は低いとみられている。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 運命動機が連なる緊迫した楽章。柔和な長調の第2主題の背後にも運命動機が鳴っている。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート のびやかな第1主題と上行形の第2主題に 基づく自由な変奏曲。美しくも雄大な音楽で、安らぎと緊張感が同居している。

第3楽章 アレグロ 運命動機中心の主部に、荒々しい中間部が挟まれたスケルツォ楽章。不気味な経過部分が盛り上がり、頂点で第4楽章へ移る。

第4楽章 アレグロ 輝かしい凱歌のような第1主題で開始。滑るような第2主題を交えながら、果てしなく高揚していく。新たに加わるピッコロ等も清新な効果を発揮。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲:1807~08年/初演:1808年12月22日、ウィーン/演奏時間:約31分 楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ハイドン

チェロ協奏曲 第1番 八長調

ヨーゼフ・ハイドン (1732~1809) は、長年、ハンガリーの大貴族エステルハージ家に仕え、交響曲やオペラ、室内楽作品など、宮廷で演奏するために数々の作品を書いた。1761年に初めてエステルハージ家に迎えられ、1766年に楽長に昇格してからは、当主で熱心な音楽愛好家だったニコラウス侯 (1714~90) の命を受け、宮廷生活を彩る音楽の作曲と演奏や、宮廷楽団の楽員の管理や監督など、1790年にその職を辞するまで多くの職務を果たした。

ハイドンがエステルハージ家のために書いた作品は、楽譜がすべて残っているわけではなく、散逸や消失したものも少なくない。現存するチェロ協奏曲は、八長調と二長調の2曲のみである。八長調の作品は、1961年にプラハ国立博物館の蔵書のなかから筆写譜が発見され、史料研究等からハイドンの作品と確認、1760年代前半の作品と推定された。当時エステルハージ家の楽団には、ヨーゼフ・ヴァイグル(1740~1820、同名の作曲家の父)というチェリストが在籍し、おそらく彼の助言を受けながら書かれたのであろう。高度なテクニックとされた重音が多用されることから、ヴァイグルが名手だったことが窺える。

ちょうど時代はバロックから古典派への過渡期であり、バロック時代の協奏曲に 特徴的なリトルネッロ形式(同じ主題部が反復され、その間に独奏部分が挟まれる) の名残りもみられる。

第1楽章 モデラート、八長調、4/4拍子 オーケストラによる主題部に続いて、 独奏チェロが同じ主題を奏でる。さらに独奏チェロが新しい楽想を導き、技巧的 な展開部に入る。再現部は独奏チェロによる主題で始まる。

第2楽章 アダージョ、ヘ長調、2/4拍子 独奏チェロと弦楽のみの心温まる緩徐 楽章。

第3楽章 アレグロ・モルト、ハ長調、4/4拍子 独奏チェロが細かなパッセージ や跳躍音程で技巧を示し、叙情的な旋律を歌わせるなど華やかに活躍する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲:1762~65年頃/初演:不明/演奏時間:約24分 楽器編成/オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏チェロ



Program Note:

ブルックナー

交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー (1824~96) が交響曲作曲家として揺るぎない名声を確立したのは、交響曲第7番のセンセーショナルな成功においてであった。それまで演奏家や聴衆から長大な交響曲ゆえに長すぎると言われ、批評家からは皮肉たっぷりに苦言を呈されたが、それでも信念を貫き通したブルックナーは、60歳を過ぎてようやく栄光を手にすることができた。

交響曲第7番は、1881年秋に着手された。ちょうど第2楽章のコーダの直前まで進んだところで、尊敬するリヒャルト・ワーグナー(1813~83)の訃報が届き、大きなショックを受けた。バイロイト祝祭劇場に足を運び、作曲家と言葉を交わしたこともあったブルックナーは、「いまは亡き巨匠[ワーグナー]のための」追悼の音楽として、ワーグナー・チューバの合奏で始まるコーダを書き加えることで、弔意を表した。ワーグナーが〈ニーベルングの指環〉で使用するために考案したワーグナー・チューバを、ブルックナーはこの交響曲で初めて用いた(続く第8番、第9番でも使用する)。コーダはテノールとバス各2本ずつのワーグナー・チューバと、通常のチューバ1本を組み合わせたチューバ群で奏され、その深い響きは印象的である。そして、第3楽章は書き終えていたので作曲の筆は終楽章へと進み、「ザンクト・フローリアン、1883年9月5日」の書き込みとともに完成した。

本日は、ノヴァーク版による演奏である。この交響曲は、1885年に初版譜が出版されたが、その際に弟子たちの助言で、第2楽章のコーダに入る直前にシンバル、トライアングル、ティンパニが加えられた。20世紀になると、音楽学の研究成果を踏まえた全集版が刊行され、1944年に出版された旧全集(ハース版)は、完成後の変更は受け入れないという方針からこれらの打楽器は削除された。一方、1954年出版の新全集(ノヴァーク版)は、初版譜出版の際、ブルックナーも変更や加筆を了承したという立場から、削除された打楽器は復活することになった。そのほか細かい変更等はあるものの、版や稿の問題が複雑に絡むブルックナーの他の交響曲と比べると、第7番の各版の相違はそれほど大きくない。

第1楽章 アレグロ・モデラート、ホ長調、2/2拍子 ソナタ形式。弦楽器のトレモロを背景に悠々とした息の長い第1主題が示され、オーボエとクラリネットで始

まる第2主題は大きく高まり、その頂点で軽やかな口短調の第3主題が現れる。 展開部は転調を重ねて、大きな流れを作り出し、再現部に続くコーダでは、主音(木音)が長く保続され、第1主題が輝かしく回帰する。ノヴァーク版ではここに「次第にいくらかテンポを速めて」と指示が記入されている。

第2楽章 アダージョ、非常に厳かに、非常にゆっくりと、嬰ハ短調、4/4拍子 A-B-A'-B'-A"の5部分形式。主部(A)は、チューバを中心とする荘重な響きで始まり、弦楽器に引き継がれる。主題の後半には同時期に作曲していた讃歌〈テ・デウム〉(1881~84)終曲の主題が用いられた。B部分(モデラート、嬰ヘ長調、3/4拍子)は、ヴァイオリンの澄み切った響きが美しい。2つの部分が交替して進み、主部は再現されるたびに拡大し、変容していく(B'は変イ長調)。その緊張の頂点で打楽器を加えるべきか議論は絶えないが、抑圧された響きを発散させる効果は大きい。チューバ群による追悼のコラールを経て、最弱音の長三和音の響きで終結する。

第3楽章 スケルツォ、非常に速く、イ短調、3/4拍子 3部形式。トランペットがシグナル音型で呼びかけるリズミカルな主部と、穏やかに広がるトリオ部(いくらか遅く、へ長調)との鮮やかな対比がまぶしい。

第4楽章 フィナーレ、動きをもって、しかし速くなく、ホ長調、2/2拍子 ソナタ形式。弦楽器のトレモロを背景に、第1楽章第1主題から導き出された、複付点のリズムが特徴的な第1主題が現れる。コラール風の第2主題は静かに響き合い、激烈な第3主題は全ての楽器で奏される。再現部は第3、第2、第1と逆の順序で主題が戻り、最後は主音の保続の上に第1楽章第1主題が高らかに回想される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲:1881~83年/初演:1884年12月30日、ライプツィヒ/演奏時間:約64分 楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、 チューバ、ワーグナー・チューバ4、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、弦五部 **| | / <u>L</u> (** 日曜マチネ・

Program Notes